

ルイス・ハイン「児童労働シリーズ」より
Lewis Hine, from "Child labor series"
1909, 11.3×17.0cm, ゼラチン・シルバー・プリント
1874年ウィスコンシン州オシコシに生まれ、27歳のとき
ニューヨークに出て教師を務める。
エリス島に到着する
移民や児童労働を調査、記録した。
このハインの写真は多くの新聞や雑誌などにとりあげられ、
児童労働法の制定に貢献したといわれる。
ジェイコブ・リースとともにアメリカの
ドキュメンタリー写真におけるパイオニアであった。
1940年ニューヨーク州
ヘイスティングス・オン・ハドソンに没。

master works, master photographers



2000年1月28日(金)～4月6日(木)

[学芸員によるフォローアクチャー] 毎月=第1,第3金曜日 午後2時～

[主催・会場] 東京都写真美術館 3階常設展示室

[開館時間] 午前10時から午後6時まで(木・金のみ午後8時まで)入館は閉館の30分前まで

[協力] 株式会社 乃村工藝社

[休館日] 毎週月曜日(休館日が祝日または振替休日の場合はその翌日)

[料金] 常設展=一般500(400)円／小・中・高校生250(200)円

*館内の小・中学生、第2・第4木曜日に観覧する高校生(要証明)は、常設展のみ無料となります。()内は20名以上の団体料金です。

*小学生未満、65歳以上の方、および障害のある方とその介護の方1名は無料になります。

[交通機関] JR恵比寿駅より徒歩7分(恵比寿ガーデンプレイス内) お車でのご来館はご遠慮ください。

[インターネットアドレス・NTTドコモダイヤル] <http://www.tokyo-photo-museum.or.jp> 03-3272-8600

*作家、作品に関する情報は、館内の情報検索システムでもご覧になれます。

編集=東京都写真美術館 発行=財団法人 東京都歴史文化財団 東京都写真美術館 ©2000

デザイン=椿島加奈 製作=株式会社 求龍堂

東京都写真美術館
〒153-0062 東京都墨田区三田1-13-3 Tel.03-3280-0031
1-13-3 Mita, Meguro-ku, Tokyo 153-0062

R50
古紙配合率50%再生紙を使用しています

写真表現の軌跡

第4部 アメリカの写真——東京都写真美術館コレクション展



1 プラット・D・バビット
《展望台からのナイアガラの滝の眺め》
Platt D. Babbitt,
"View of Niagara Falls from prospect point"
1855年頃, 16.4×21.5cm, ダゲレオタイプ
ナイアガラの滝で観光客のために土産物として
作られた写真は数多くあるが、
このアメリカ側の展望台で1853-1870年の間、
写真撮影の権利を得て営業していたのがバビットである。
定位位置にカメラを固定し(可搬式の三脚ではなく)、
顧客の群像を雄大な滝を背に撮影していた。
なおアメリカのイーストマン・ハウスには、
1849年にサウスウォース&ホウズが撮影した
殆ど同じ構図のダゲレオタイプ
(資料で見るかぎりバビットとは左右逆像)も
保存されている。

4 アルフレッド・スティーグリツ「『三等船室』」
Alfred Stieglitz, "The Steerage"
1907, 33.1×26.1cm, フォトグラビア
1864年、ニュージャージー州ホーボーケンに生まれた。
6歳のときニューヨークに移り、81年にはドイツへ移住する。
スティーグリツはベルリン工科大学に学び、
そしてベルリン大学では写真化学を専攻。
90年合衆国に戻り、写真の制作および啓蒙活動、写真雑誌の編集などに活躍。
またリンクト・リングのアメリカ最初の会員である。
97年ニューヨーク・カメラクラブを設立し、機関紙「カメラノーツ」を発行。
また1902年フォト・セッション(分離派)を結成。
1903年、機関紙「カメラワーク」を創刊する。
その後、ギャラリー「291」を1905年ニューヨークに開設し、写真だけではなく
最先端の芸術の合衆国での展開における功労者であった。
スティーグリツは、理論と自身の制作の両面から写真を絵画から分離し、
写真的表現を確立する上での、
ある意味で「思想的」な改革をおこなった。46年没。



5 ポール・ストランド「女性、パツクアロ」
Paul Strand, "Woman, Patzcuaro" from "Photographs of Mexico"
1933, 16.4×12.8cm, フォトグラビア
1890年ニューヨークに生まれた。14歳のとき通っていた学校で
ルイス・ハインによる写真の課外授業を受け、
連れて行かれたギャラリー「291」から衝撃を受け。
以後定期的に作品をスティーグリツに見せて意見を聞く習慣となった。
スティーグリツは、ストランドを高く評価し、
カメラワーク最終号は、ストランド特集であった。
陸軍でレンジング技師を務めたり、医学映画の製作会社で働くなど
写真にかかわるいろいろな仕事に手を出しながら、
チャールズ・シラーと一緒に映画「マンハッタ」を制作している。
32年、メキシコ政府の写真・映画部門の責任者となり、モスクワでは
エイゼンシュタインなどと交流をもつたが、
提案された映画の共同制作は断っている。
写真と映画の両方で活躍し、1946年から47年にかけて
ニューヨーク近代美術館で大きな個展を開催した。
48年以後フランスに住み、76年没。



2 ティモシー・オサリヴァン
《南北戦争—死の収穫、ゲティスバーグ》
Timothy H. O'Sullivan,
"Incidents of the War - A harvest of death, Gettysburg"
1863, 17.4×22.6cm, 銀版紙
1840年にニューヨークで生まれたオサリヴァンは、
マシュー・ブレイディの撮影隊のなかでガードナーに次ぐ
位置を占めていた写真家である。
ガードナーに従って63年にブレイディのもとを去るが、
ガードナーの名前で
発表された南北戦争の写真のうち半数近くが
オサリヴァンの撮影とされている。
戦後になって未開拓地の
探検隊に同行し撮影しているが、峡谷の風景など
今に残るその仕事の数々には、
いわゆる「開拓者精神」のようなものを感じさせられる。82年没。



3 ウィリアム・ヘンリー・ジャクソン
《ガーディナーズ川上の巨大温泉》
William Henry Jackson,
"Mammoth hot springs on Gardiners River"
25.2×33.1cm, 銀版紙
1843年合衆国東部で生まれたジャクソンは、
父の影響で早くから写真を始め、
南北戦争後、西部開拓の記録に従事した。
ベンシルヴァニア大学の地質調査隊に同行して
ロッキー山脈や、開拓中の
ユニオン・パシフィック鉄道を撮影した。
イエローストーン公園の撮影。
合衆国がここを国立公園を指定する
根拠となったともいう。
なお、合衆国政府の調査団に
数多く同行したジャクソンの発見した
渓谷や湖には彼の名前がつけられている。
1942年没、99歳であった。



6 エドワード・ウェ斯顿「ピーマンNo.30」
Edward Weston, "Pepper No.30"
1930, 23.5×18.6cm, ゼラチン・シルバー・プリント
写真芸術におけるピカルとも呼ばれるウェ斯顿は、
1886年イリノイ州ハイランドパークに生まれた。
少年時代にシカゴで写真展を見て興味を持ち、父親に買ってもらった
ボックスカメラで写真を始め、後にカリフォルニアで写真館を始める。
1917年頃から、クローズアップによって
人間の視覚とはまったく異なる写真特有の表現を確立。
22年の展覧会を契機にメキシコへ移住し、リベラ、オロスコ、
シケイロスなどの先鋭的な芸術家と交流をもち、影響を受けた。
26年カリフォルニアに戻ったウェ斯顿は、
クローズアップによる静物のほか、風景、人物(裸体)などに
深いピントによる写真的リアリズムを極限まで追求した。56年没。